十勝岳の火山活動解説資料

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から３（入山規制）に引上げ＞

十勝岳では、熱活動が高い状態が続く中、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震が増加しています。

十勝岳では、火山活動が高まっており、62-2 火口から概ね３km の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があることから、本日（12 日）９時 30 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から３（入山規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項】

62-2 火口から概ね３km の範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況（図２～８）

十勝岳では、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅２μm以上）が12日に２回発生し、前30日間で５回と多い状態で経過しています。

３月頃から山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が認められている中で、４月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、高感度監視カメラでの発光現象（火映を含む）の観測頻度増、62-2火口付近及びその周辺での地震活動のやや活発化がみられています。５月以降、監視カメラにより、62-2火口の噴煙及び振子沢噴気孔群の噴気が以前より高く観測される日が増えています。その後、ごく小規模な噴火が62-2火口付近で７月22日、８月５日、６日に発生しています。

○活動評価

３月以降、山体付近やや深部の膨張を示す地殻変動が続く中で、４月頃から、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、62-2 火口付近での熱活動のさらなる高まりがみられ、７月下旬から８月上旬にかけてはごく小規模な噴火が複数回発生しています。

このように火山活動が高まっている中で、山体付近を震源とする振幅の大きな地震が増加しており、十勝岳ではこれまでより規模の大きい噴火が発生する可能性が高まっています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータ及び機動的な調査観測・解析グループ（国立研究開発法人防災科学技術研究所・東京大学）のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

図１　十勝岳　警戒が必要な範囲

・62-2 火口から概ね３km の範囲（赤円内）では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

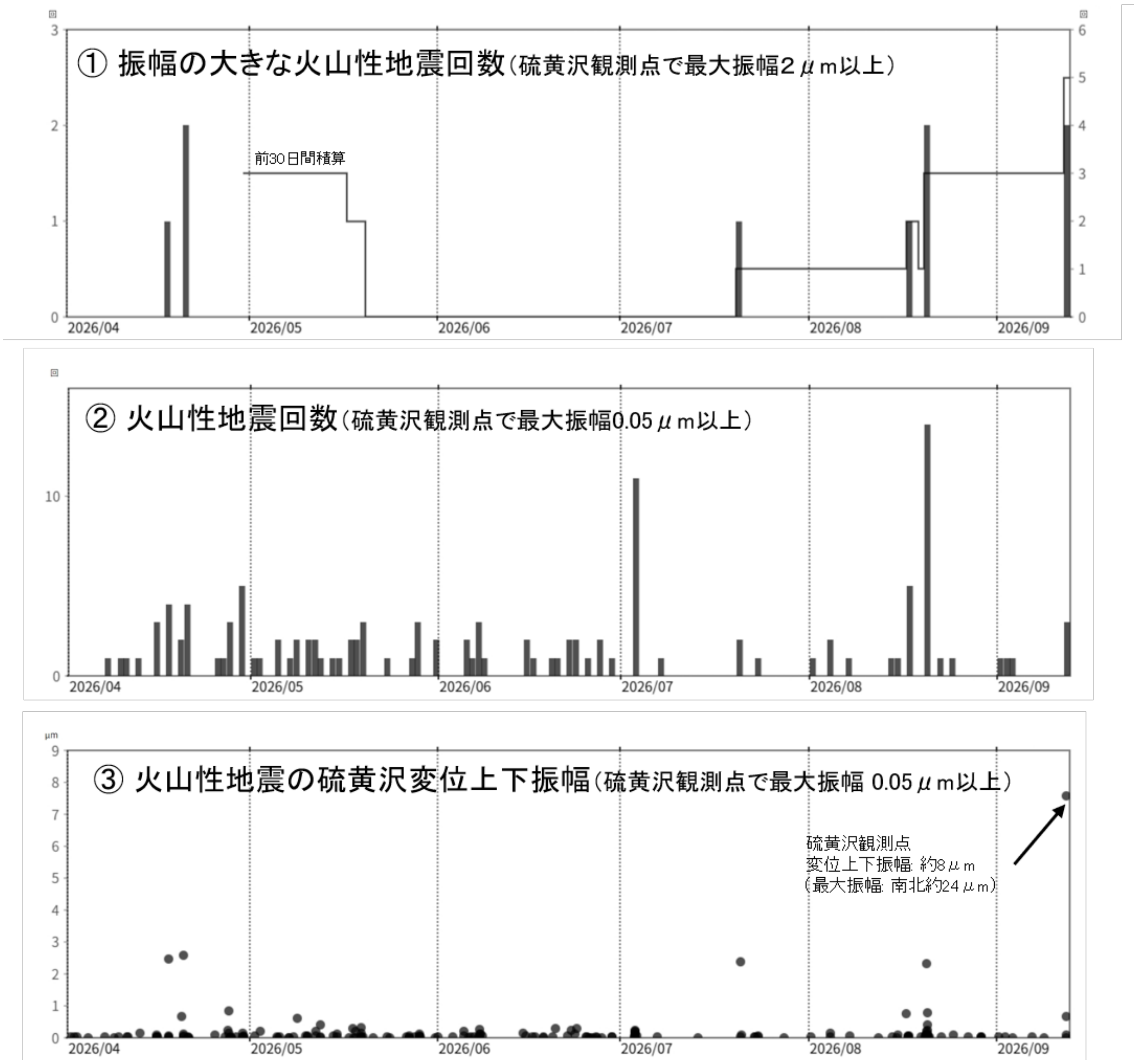


図２　十勝岳　火山性地震の発生状況（2026年４月～９月12日10時（速報値））

・８月17日から振幅の大きな火山性地震が増加しており、12日には前30日間の積算回数が５回に達しています。
・12日８時20分頃の地震は山麓の硫黄沢観測点で変位最大振幅24μmと特に規模が大きく、十勝岳付近で体に感じる揺れがあった可能性があります。

図３　十勝岳　北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

・12日10時現在、62-2火口付近の噴煙・噴気の状況は気象条件等の影響により確認できませんが、同日明け方には特段状況に変化ありませんでした。

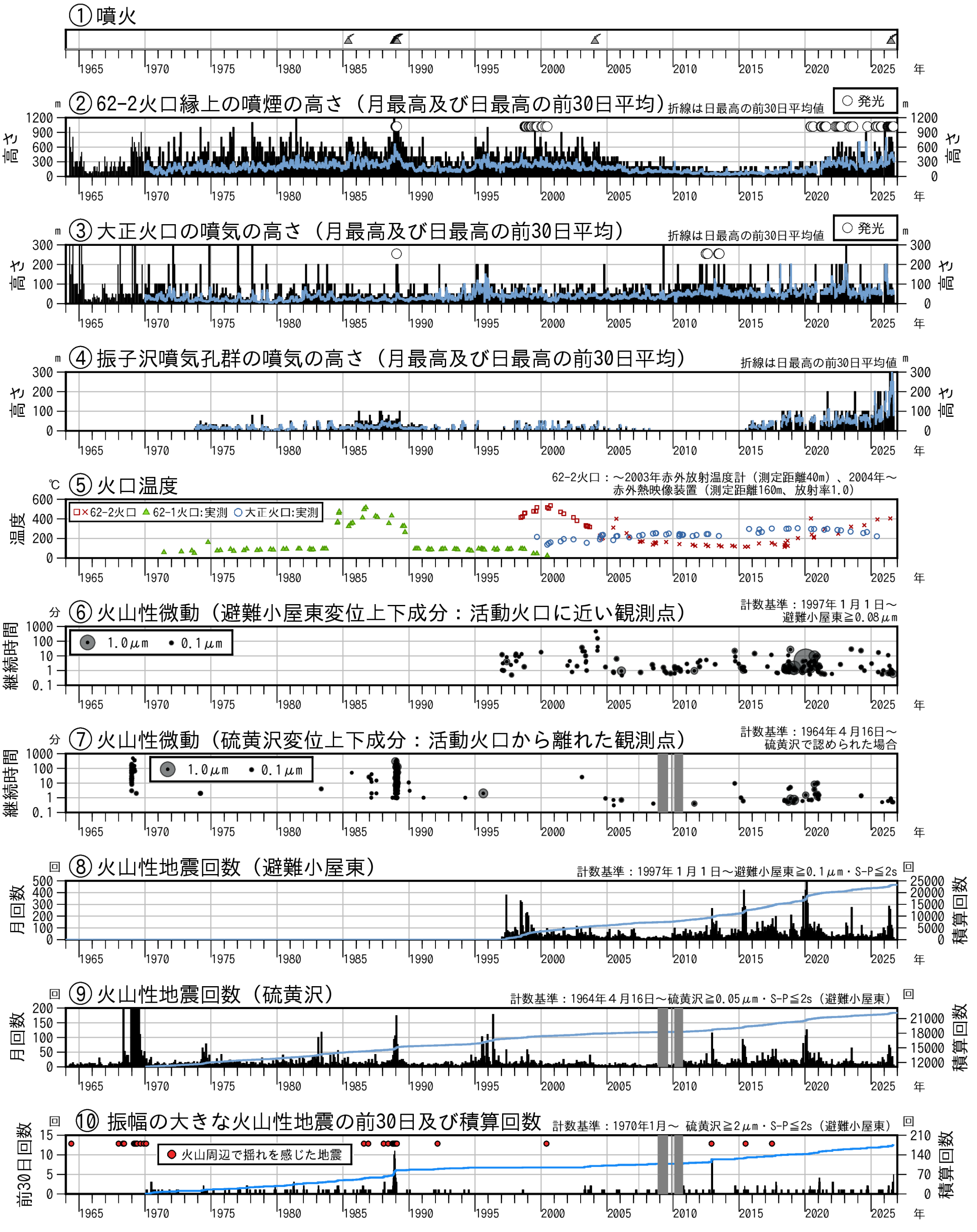


図４　十勝岳　火山活動経過図（1964年１月～2026年９月12日）

グラフの横軸は1964年１月～2026年12月です。

②の発光を示すプロットは、目視や監視カメラ等で 62-2 火口付近（62-2 火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨⑩の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

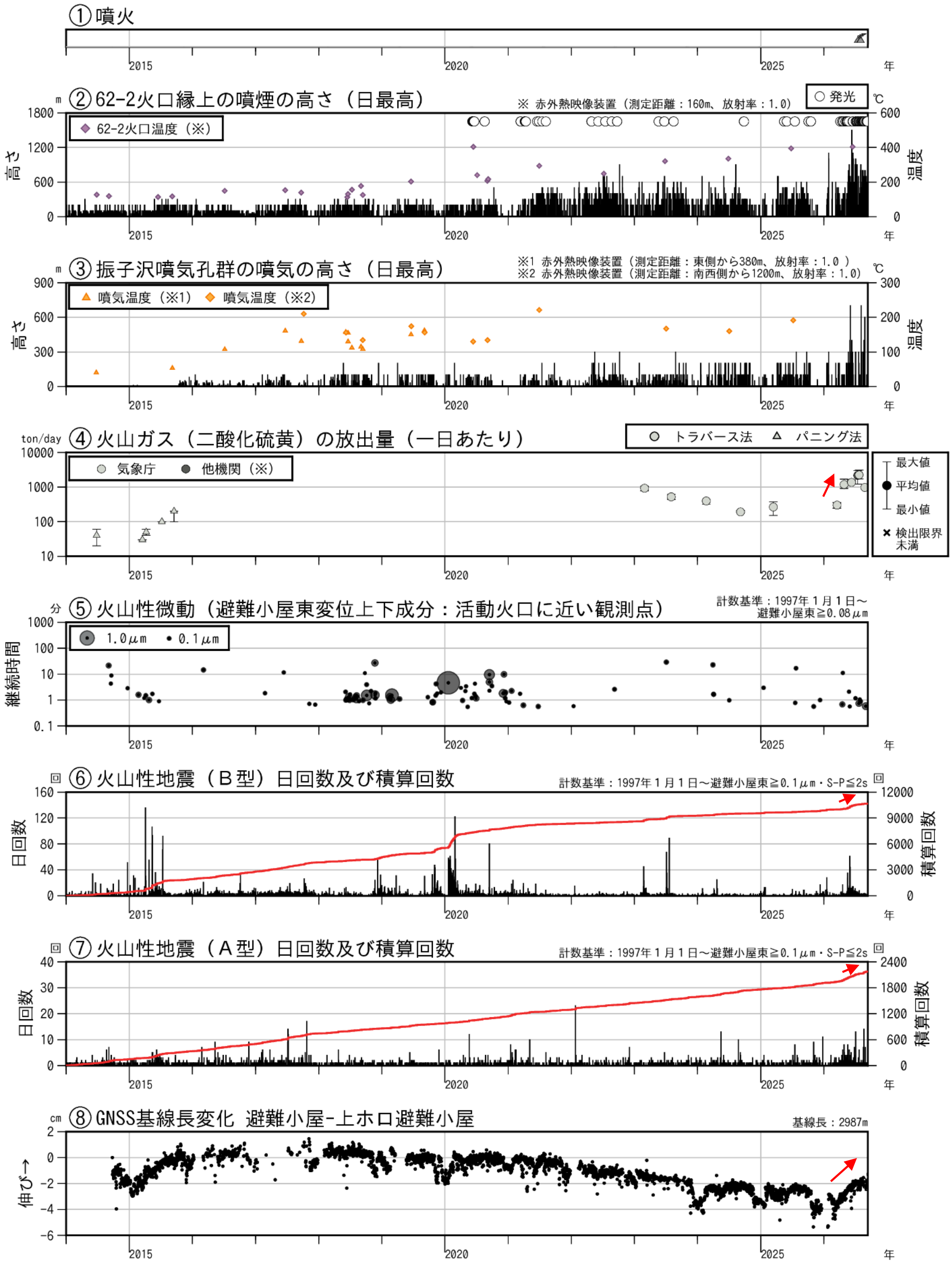


図５　十勝岳　火山活動経過図（2014 年１月～2026 年９月 12 日）

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。
⑥は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図７参照）で発生したと推定されるＢ型地震の回数、⑦は主にその周辺で発生したと推定されるＡ型地震の回数を示します。
⑧は観測点配置図（図８）の基線④に対応しています。

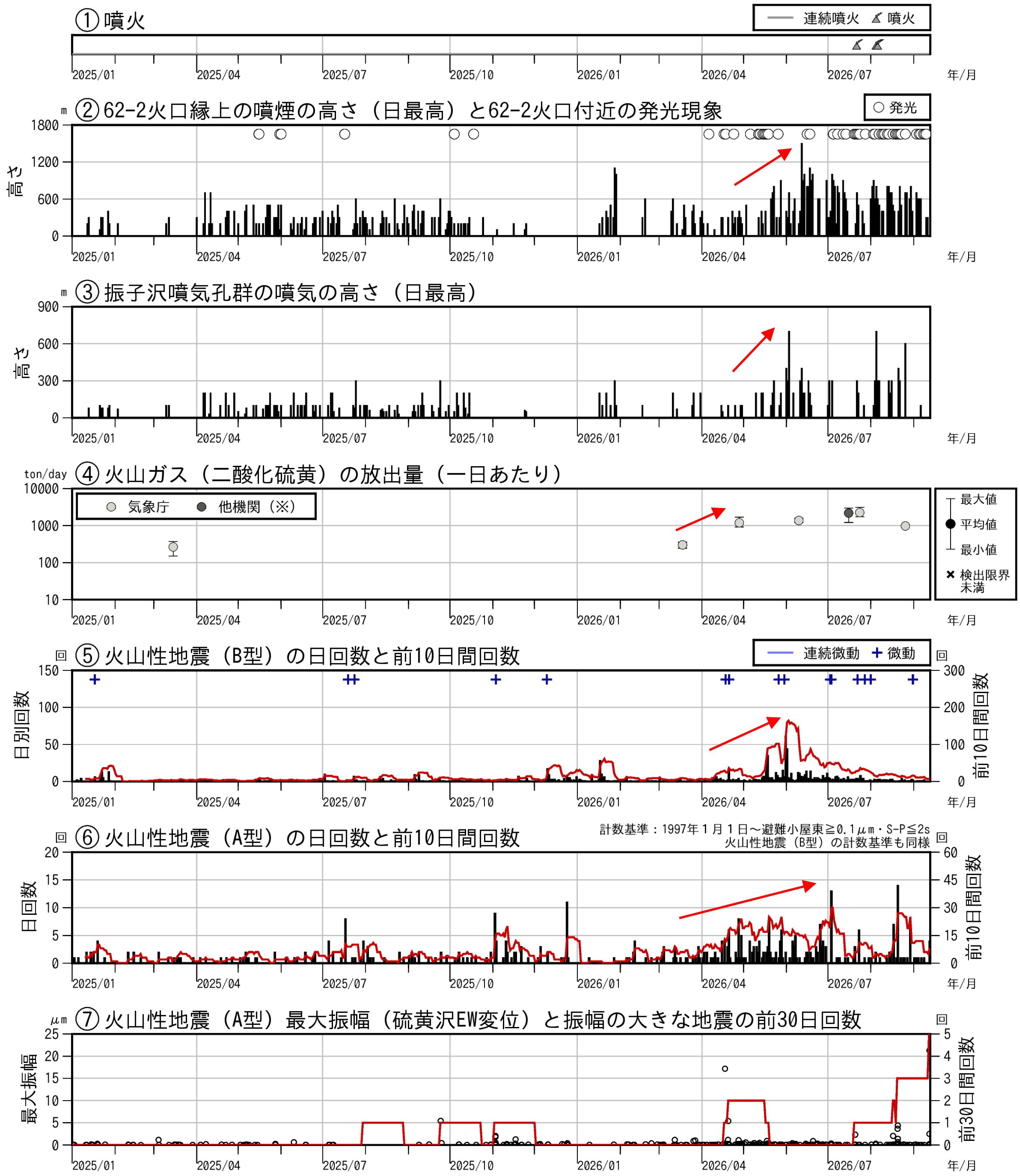


図６　十勝岳　火山活動経過図（2025 年１月～2026 年９月 12 日）

②の発光を示すプロットは、監視カメラで 62-2 火口付近（62-2 火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。

⑤は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図７参照）で発生したと推定されるＢ型地震の回数、⑥は主にその周辺で発生したと推定されるＡ型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの前 10 日間の積算回数を示します。

⑦の赤折れ線は振幅の大きな地震の前 30 日間の積算回数を示します。

・４月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑤⑥）が認められています（赤矢印）。また、62-2火口や振子沢噴気孔群付近の噴煙・噴気の高さもより高まり（赤矢印）、その後も高い状態が継続しています（②③）。

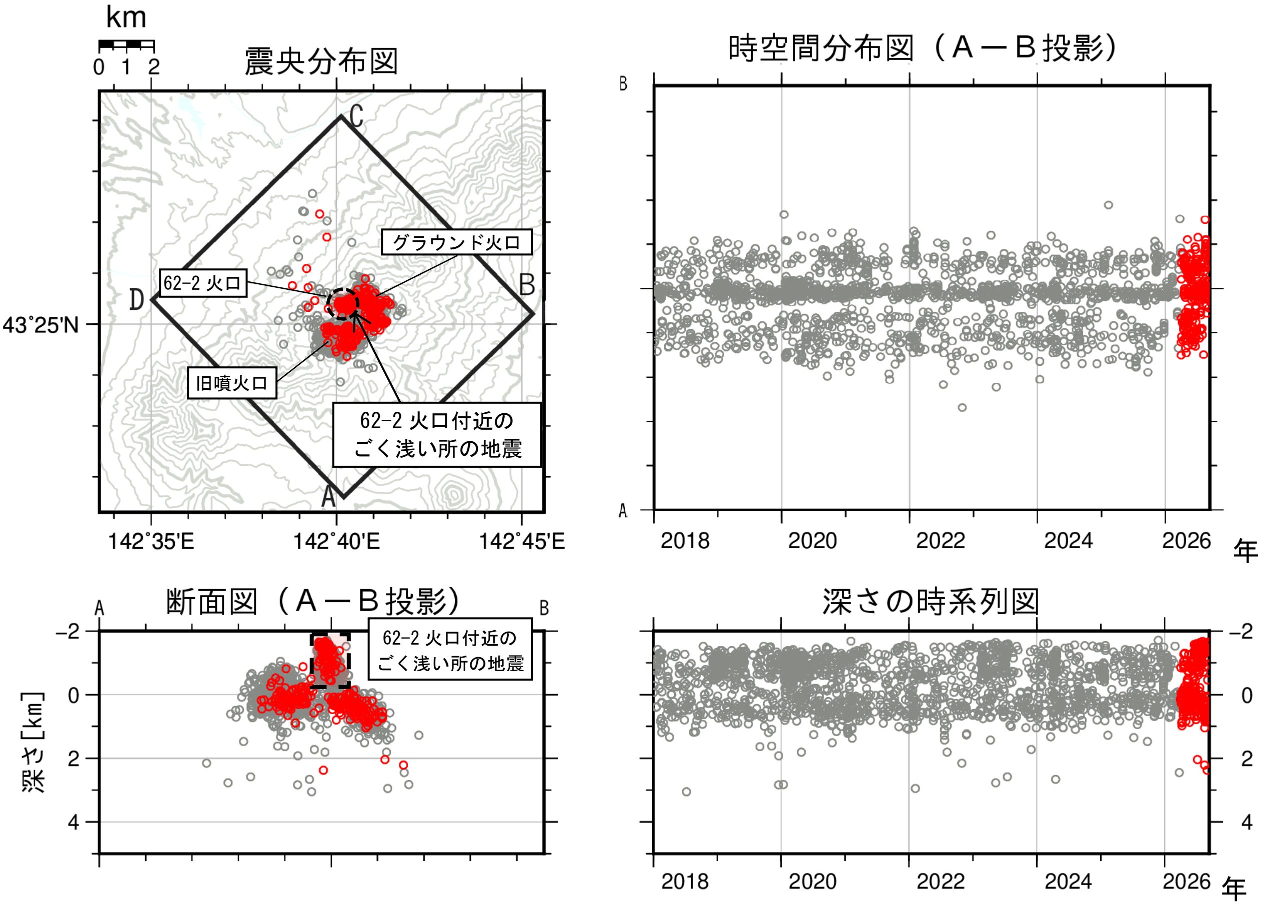


図７　十勝岳　火山性地震の震源分布（2018年１月１日～2026年９月12日）
○：2018 年１月～2026 年３月の震源　○：2026 年４月～９月 12 日の震源

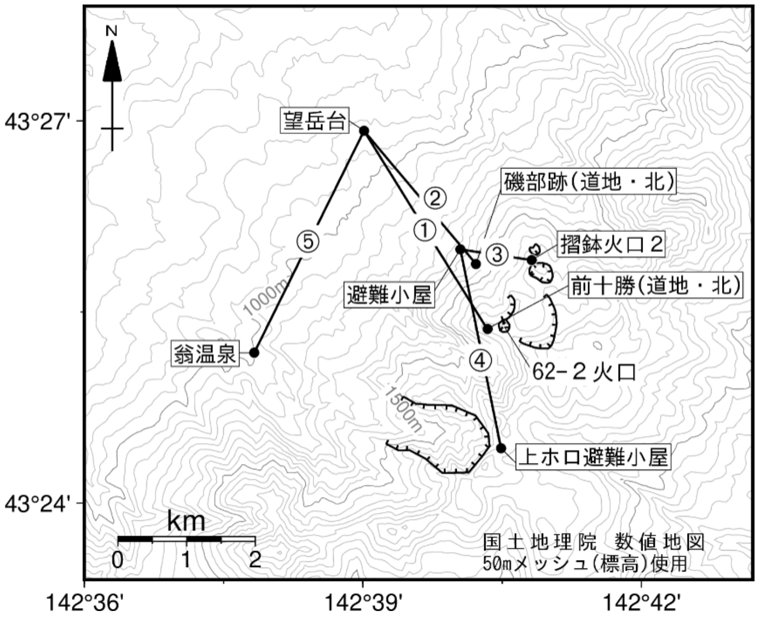
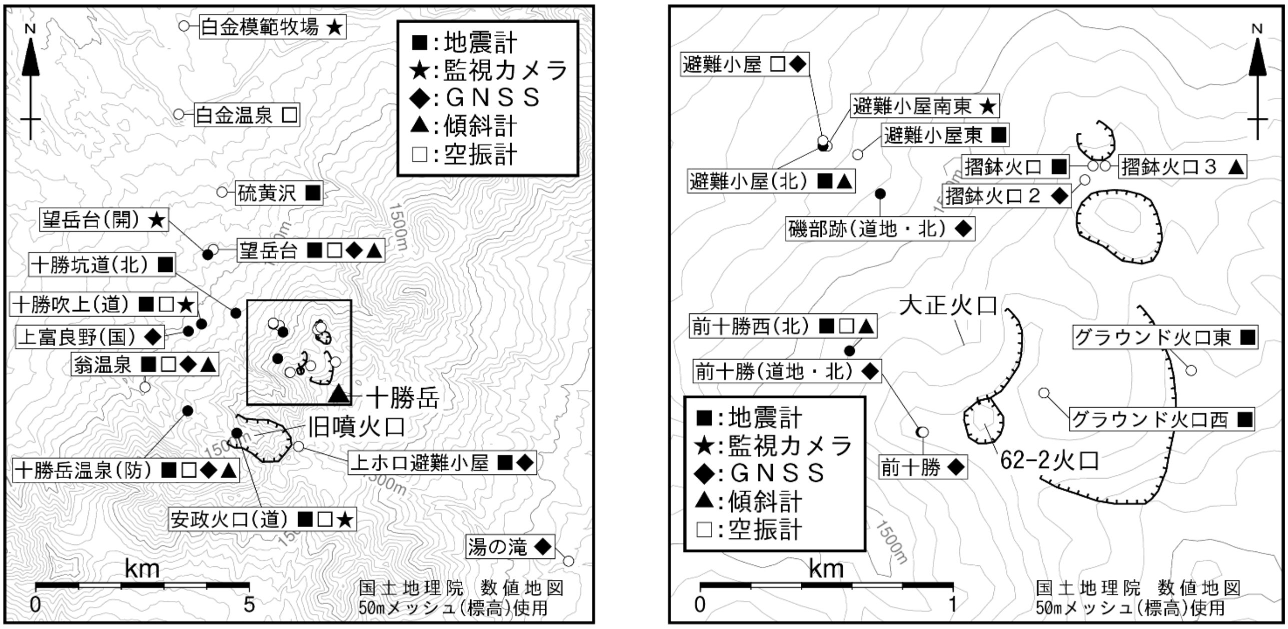


図８　十勝岳　GNSS連続観測　観測点配置図
図中の基線④は図５のグラフ⑧に対応しています。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は他機関の観測点位置を示しています。
（開）：国土交通省北海道開発局、（国）：国土地理院、（北）：北海道大学、（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所、（道）：北海道、
（道地）：地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図９　十勝岳　観測点配置図